氏名	福岡　龍太
ヨミガナ	フクオカ　タツヒロ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博美第581号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉　障碍者の芸術活動における支援者のあり方　―障碍者と支援者との啐啄の関係を通して―
	〈作品〉　知の山・奔放の河
	〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	本郷　寛
（論文第１副査）	宮崎大学	教授	（教育文化学部）	石川　千佳子
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津　文哉
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福　誠
（副査）	和歌山大学	講師	（教育学部特別支援教育コース）	竹澤　大史
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

筆者は、3年前より、障碍者と共に芸術活動をする実践を社会福祉事業所や障碍児保育施設など、主に5か所でおこなってきた。本論文はその実践から見えてきた、芸術活動、特に美術制作活動における支援者の支援のあり方について論じるものである。

筆者は、2015年5月に「楽画会（らくがかい）」と名付けた、障碍者とともに表現環境のすそ野を広げる実践活動の場を立ち上げた。同年10月から現在に至るまで、楽画会は障碍者福祉施設や障碍児学童施設において定期的に開催されている。

この実践活動の中で、筆者は支援者として、時には指導者として、自分自身を表現するのに消極的な多くの障碍者と対峙した。その際に、障碍者が豊かな生活を送るために必要なのは物だけではなく、心の支援のような無形のモノがなければならないという問題意識を持ち、その無形の支援を、描画行為を通して実践的に追究しようと着想したことが本研究の動機である。

いわば障碍者と支援者とが啐啄（そったく）の関係を構築することで、障碍者の真の表現ができうると考えるに至った。ここで言う啐啄の関係とは、障碍者と支援者が寄り添いながら表現活動を共有し、各々の表現を楽しむことを指している。また真の表現とは、他者から導かれて表現することではなく、支援者との関係から生まれる障碍者の自発的な表現を指し、障碍者がなかなか表現できない状態も、真の表現につながる貴重な時間だととらえる。

筆者が障碍者とおこなう表現活動は、積極的に表現することができる特定の障碍者のスキルアップを図るものでもなければ、障碍の特徴や程度に合わせて活動内容を変えるようなものでもない。真の表現を目指して、ほとんどの障碍者ができるであろう「描く」ということを楽しめる環境づくりの充実が企

図されている。

本論文の中心は、そうした実践活動の記録である。記録にあたっては参与観察法を援用し、支援者の主観を排することなく、障碍者と支援者の相互的な関係から生成される場の状態を記述している。

管見の限り、障碍者の芸術活動支援に関する研究において、特定の障碍に対する芸術表現へのアプローチや方法論を示したものはあるが、障碍を区別しない芸術表現の支援を対象とした研究は見当たらない。本研究は、多様な障碍のある広範な世代の障碍者との芸術活動の取り組みに基づき、支援の在り方を提示しようとするところに独自性があり、現在の日本で推進されている障碍者の芸術活動における支援の課題を解決するための一助となり得るものである。そして、筆者は実践活動を継続することにより、障碍者と健常者の垣根を感じることがない社会の構築の実現のために、本研究の成果を活かしたいと考えている。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では、2章以下に実践記録を述べるための予備考察として、日本における障碍者の芸術活動の現状と、芸術活動の支援における課題を論じる。そして、筆者がおこなってきた活動や楽画会設立の趣旨と目的について述べる。

第2章では、言葉による意思疎通が不得手な障碍者との表現交流の実践から支援の在り方を探る。この実践は、重度障碍者共同生活介護施設Nにおける楽画会の活動によるもので、実践記録をもとに参加者と筆者との信頼関係の構築や真の表現の変遷について論じる。

第3章では、就労支援施設Kにおける余暇活動として取り入れた楽画会の実践を取り上げる。昼休みに開催する楽画会はわずかな時間ではあるが、定期的な活動として定着するにつれて観察された参加者の表現意欲や心の変化、日常生活における家族との関わり方について記録している。

第4章では、愛着障碍等の原因により犯罪行為に発展し得る可能性が高い障碍児とおこなった楽画会の実践について述べる。この実践で筆者は、地域生活定着支援センターGの参加者に対して犯罪抑止力につながる美術活動による関わりを探り、社会生活への適応を目指した。障碍児の心の声を安心して真の表現に変換できる環境をつくることで見えてきた心の成長の記録である。

研究を総括する結章では、楽画会から見えてきた表現活動の実態や、楽画会の意義と矛盾を明らかにする。そして啐啄の関係による支援活動の重要性を再認識し、楽画会の矛盾を克服するための試案を提示する。さらに今後の展望で障碍者の芸術活動における支援の在り方について考察し、結論とする。

究極的に、筆者は障碍者と健常者がともに垣根のない社会を目指している。そのためには、筆者の得意とする美術活動を用いて障碍者支援活動を続ける必要がある。多様な支援のかたちは障碍者を支えるようになりつつあるが、支援者一人ひとりが得意の分野を活かして継続した支援ができたならば、目指す社会は必ず近づいてくるにちがいない。

（論文審査結果の要旨）

申請論文は、主に国内5カ所の社会福祉事業所や障碍児保育施設等において、申請者が障碍者と共に行った芸術活動「楽画会」の3年間にわたる実践記録にもとづき、美術を専門とする者が描画行為を介して障碍者の芸術活動に関わるあり方を考察したものである。

当該論文の特色は以下の点にみられる。まず、芸術活動を行う場における支援者と障碍者との関係が「啐啄同時」という禅語で捉えられている。支援者は表現活動に必要な材料や環境を整えるが、実際の活動の場においては言葉による指導は一切行わず、支援者も障碍者も各々が表現行為に没頭する。両者による場の共有と協働から生成してくる表現を「真の表現」と申請者は呼んでいるが、その中に表現を行わないという在りようも含まれているところに、禅的精神に対する体験を通した深い理解が窺われる。

次に、本論文の核心となった三つの実践研究である。障碍の種類も年齢層も異なる事業所や施設における楽画会の実践を、申請者は参与観察法に則り、自らの意識や心情をも排除することなく、いわばその場の内側から徹底的に記録してきた。この詳細かつ臨場感のある記録とその考察には説得力があり、美術教育研究者はもとより特別支援教育研究者、福祉関係者等にとっても、示唆に富む内容を有すると

考えられる。
　また、申請者は比較事例として、健常者の児童と共に行った楽画会や、支援者が美術専門家ではない保育士による楽画会の実践についての検討も行っており、数値化とは異なる形での実践記録の客観化が担保されると同時に、障害の有無に限定されない美術活動に関わる支援者のあり方が提言されている点においても、わが国の喫緊の課題である共生社会の実現に貢献する論文といえよう。
　以上のような点から、審査会においては課程博士論文の水準に十分達していると評価され、全員一致で合格とした。

（作品審査結果の要旨）

　一見、木材・廃材の山のように見える本作は、実は慎重に工作され、遊び心に満ち溢れた「音具」（本人の言説による）である。鑑賞者はその装置によって知らず知らずのうちに作者が用意した作品世界に引き込まれていく。
　それが本作の最大の魅力である。鑑賞者は、床一面に散らばっているように見える木材の、どれを手に取っても不思議な音が発生する装置である、という点に驚くに違いない。それだけ周到に準備され、工作を施された美術作品である。散らばっているように見える、という点についても「散らばっている」ように細心の注意を払って設置されている事が重要であるし、成立が困難なインスタレーションであることを考えても、合格点に値する。
　こういった作品形態が陥りがちな抒情的な甘えた雰囲気は本作には見られない。その点でも作者が作品に込めた思い、鑑賞者（主たる鑑賞者は年少者を想定しているようであるが)、年長の大人から見ても、その作品形態を通して作者が持つ子供や人間に対する深い愛情を感じさせるコンセプトが感じられ、その点も審査員全員の共感をもって評価された。自己満足に陥らず、自己の作品世界が表現の領域まで高められており、審査員全員の一致を見て博士号の取得に値する、とされ、合格とした。

（総合審査結果の要旨）

　近年、社会において障碍者の芸術活動が注目され、その支援のあり方が課題とされる。こうした社会状況の中で、申請者は障碍者の芸術活動に出会い、美術家として、教育者として、また人として自らの心に実直に向き合うことから、複数の社会福祉事業所や障碍児保育施設等において、長期にわたり障碍者と共に芸術活動に取り組んできた。
　申請論文は、主に国内5カ所の社会福祉事業所や障碍児保育施設等において、申請者が行った芸術活動「楽画会」の活動記録にもとづき、その実践から見出された支援者のあり方について考察したものである。
　審査の過程において、提出論文の特色は、支援者と障碍者との関係が「啐啄同時」という禅語で捉えられており、活動の場においては言葉による指導は一切行わず、支援者も障碍者も各々が表現行為に没頭することで、両者による場の共有と協働から生成してくる表現が重要であるとし、禅的精神に対する体験を通した深い理解が窺われるとされた。
　また、事業所や施設における楽画会の実践を、自らの意識や心情をも排除することなく、その場の内側から徹底的に記録してきた点があげられ、この詳細で臨場感のある記録とその考察には説得力があり、美術教育研究者はもとより特別支援教育研究者、福祉関係者等にとっても、示唆に富む内容を有するとされた。
　加えて、申請者は健常者の児童と共に行った楽画会や、支援者が美術専門家ではない保育士による楽画会の実践についての検討も行っており、数値化とは異なる形での実践記録の客観化が担保されると同時に、障害の有無に限定されない美術活動に関わる支援者のあり方が提言されている点においても、わが国の喫緊の課題である共生社会の実現に貢献する論文といえるとした。
　こうした点から見て、審査会においては、課程博士論文の水準に十分達していると評価され、全員一

致で合格とされた。

博士審査展提出作品は、「知の山・奔放の河」と題され、広い空間に無造作に木片が配置された作品である。申請者は長年にわたり、一貫して音の要素を造形に取り入れ、鑑賞者が参加することで完成とする表現に取り組んで来ている。

審査の過程において、一見、木材・廃材の山のように見える作品であるが、慎重に工作され、遊び心に満ち溢れた「音具」であり、鑑賞者はその装置によって知らず知らずのうちに作者が用意した作品世界に引き込まれていく。鑑賞者は、床一面に散らばっているように見える木材のどれを手に取っても不思議な音が発生する装置であることに驚く。周到に準備され、工作を施された美術作品であるとされた。

また、作者が作品に込めた思い、鑑賞者の大人から見ても、その作品形態を通して作者が持つ子供や人間に対する深い愛情が感じられるとし、自己満足に陥らず、自己の作品世界が表現の領域まで高められた作品とされた。

こうした点から、課程博士作品として、独自の世界観を有する、一見作品上からはくみ取れない地道な仕事の積み重ねを感じさせる実技制作研究の成果が認められる作品として高く評価され、審査員全員一致で合格とされた。

総合審査結果として、論文と作品共に美術表現を追求する申請者独自の探求の姿勢をもって達成することが出来たものであり、また、その研究に対する謙虚な姿勢があってこその成果であるとされた。そして、提出された論文と作品の関係も加え、一貫した研究の成果が大いに認められる、質の高い優れた研究成果であると高く評価し総合的に合格とした。